

ここからは現代に伝わる大正前期の主な製品を、(A)洋風装身具 (B)束髪用髪飾り (C)日本髪用髪飾り (D)帯留、羽織鎖、提げ物 (E)男性用装身具に分けて紹介する。なるべく実際の製品を紹介するが、製品のないものや説明上必要な場合は、当時の商品カタログや雑誌・新聞広告などを紹介する。

1-6 現代に伝わる製品と参考図 (A)―洋風装身具

洋服に着用するネックレスなど、本来の西洋装身具の発達は大正後期以降だが、大正前期には着物に着用する首掛式懐中時計鎖、襟留、短鎖など、明らかに西洋装身具の影響を受けた装身具が作られた。こうした製品を、ここでは洋風装身具として取り上げた。

指輪

まず、代表的な洋風装身具である指輪から。指輪は着物でも気軽につけられるので、明治時代以降、日本の女性がもつとも好んだ装身具。そのため、各種宝石の入ったものなども数多く作られた。だが、戦時体制期の供出などによりほとんどの製品は潰され、現代に伝わる製品は少ない。

ここでは形や石留の特徴、宝石の種類、地金の種類などを総合的に勘案して、大正前期頃のものと思われるものを紹介する。

図1-6-1は小さめのダイヤモンドを斜めに2個並べた指輪(立爪やねじ梅のダイヤヤモンド指輪は1-2で紹介済み)。図1-6-2は合成ルビーの指輪、図1-6-3は菊爪のオパール、図1-6-4はオパールひねり爪指輪、図1-6-5はアメシストひねり爪指輪、図1-6-6はクリソフレース(染めめのう)の花形爪指輪。図1-6-7は彫金指輪。

これらの指輪は大正後期以降にも盛んに用いられているが、その出始めは大正前期なのでここで取り上げた。



図 1-6-5
アメシストひねり爪
指輪、K18



図 1-6-4
オパールひねり爪指輪、
K18



図 1-6-3
オパール菊爪指輪、
K18



図 1-6-2
合成ルビー、K18
服部時計店（現・和光）
つばめマーク入り



図 1-6-1
ダイヤモンド、プラチ
ナ、石座は立爪タイプ



図 1-6-8
金製懐中時計鎖 2 種
明治末～大正初期
全長 100cm 以上と大変長い。

首掛式懐中時計鎖
ロングネックレスのような首掛式懐中時計鎖は、明治四十年前後に主に上流社会の婦人たちに大流行した金鎖（銀鎖もあった）。だが、大正初期の女性たちもこれを身に付けた。着物の襟から垂らす襟掛け式懐中時計の流行は明治時代に終わっていた。
図 1-6-8 の 2 種は実際のもの。図 1-6-9 は上図に小型の懐中時計（輸入品）を取り付けたもの。図 1-6-10 はカタログからで図 1-6-11 はその着用写真。



図 1-6-7
彫金菊模様指輪、純金、プラチナ象嵌



図 1-6-6
クリソフレーズ花形爪指輪、K18

襟留とは着物の半襟を重ねたところに留めるブローチ応用の装身

襟留



図 1-6-11
大正 2 年 2 月 『淑女画報』 より

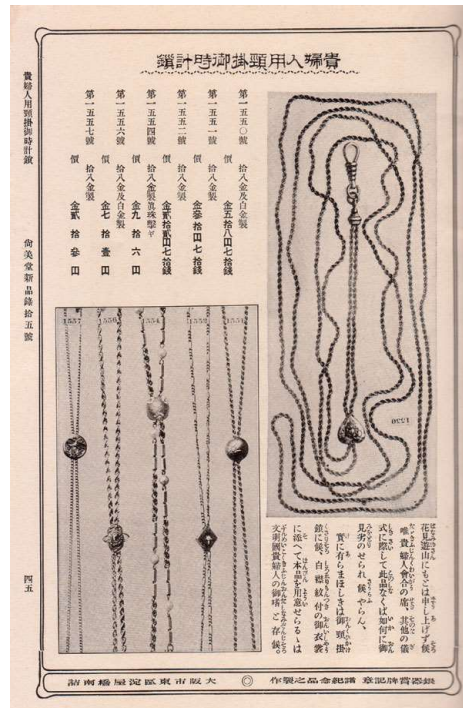


図 1-6-10
大正 2 年 1 月 『尚美堂新品録』
貴婦人の会合、儀式等に着用をすす
めている。



図 1-6-9
金側懐中時計を取り付けた状態



図 1-6-13
襟留 2 種
上：めのう、銀、金（左右 2.5cm）
下：色ガラス、金めっき（左右 2.7cm）



図 1-6-12
草花模様襟留
表面は銀で裏に金張。

具で首掛式懐中時計と同じく明治四十年前後から流行。ブローチと呼ばれることもあったが、洋服に着用する本来のブローチが普及するのは昭和初期になってから。襟留は大正初期まで用いられた。大正五年に高島屋飯田呉服店が京都駅の待合にかかげた「美人像看板」の女性の襟元にも襟留が描かれている（『日本の宝飾文化史』9章図9-10参照）。

図 1-6-12 は典型的な草花模様の襟留、図 1-6-13 は天然石や色ガラスを使った襟留 2 種。図 1-6-14 はカタログからの豪華なダイヤモンドの襟留。



図 1-6-15
短鎖、金
服部時計店（現・和光）の
刻印（つばめマーク）
鳥（鶴）が飛翔する姿を図
案化したもの。

短鎖
たんぐさり

首掛式懐中時計鎖や襟留の流行と入れ替わるように大正初期に登
場したのが短鎖と呼ばれた帯から提げる懐中時計鎖。首掛式と比べ
るとずっと短い鎖なので短鎖と呼ばれた。ペンダントのように帯前
で揺れるところが喜ばれて大正期の大ヒット商品となった。
短鎖については1-2すでに説明したが、その他にもいろいろ
デザインのものがあった（図1-6-15、図1-6-16）。

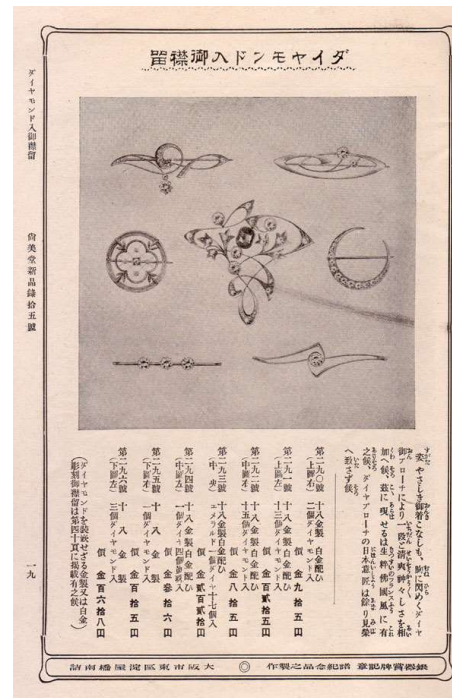


図 1-6-14
大正 2 年 1 月 『尚美堂新品録』
フランス風に作った襟留とある。



図 1-6-16
短鎖、K18, WG

図 1-6-15 は和風デザインの金の短鎖。

図 1-6-16 は真珠を使ったシャープなデザインの K 18 の短鎖。この短鎖にはホワイトゴールド (WG) が部分的に使われている。日本でホワイトゴールドが使われ始めるのは大正後期からなので、おそらくこの短鎖は大正後期のものだろう。

短鎖は鎖の先端に小型の女性用懐中時計 (輸入品) を取り付けて着用した (図 1-6-17)。上部の金具は「帯挟み」と呼ばれた。



図 1-6-17
懐中時計取り付け図
大正 6 年 3 月『尚美堂時報』より

腕時計と腕輪

大正六年頃には腕時計と腕輪も女性の新たな装身具として、一部の上流社会の婦人の間で用いられた。

腕時計が本格的に流行するのは昭和初期からだが、出始めたのはこの時代からである (図 1-6-18 下図)。

この時代はまだ短鎖につける懐中時計の方が人気が高かったが、腕時計が徐々に普及するにつれ、やがて婦人用時計は腕時計にとつて代わられるようになる。

腕輪は明治時代から少数ではあるが用いられ、『金色夜叉』の登場



図 1-6-19

宝飾腕輪

大正 6 年 4 月 『尚美堂時報』

腕時計の流行につれ、腕輪も貴婦人社会に流行とある。



図 1-6-18

(下) 腕時計 (輸入品)

(上) 短鎖

嘉丸

大正 6 年 3 月 『演芸画報』

人物なども、着物に金の腕輪という装いで描かれている(『日本の宝飾文化史』8章図8-39参照)。この時代にはダイヤ、真珠、エメラルド入りの豪華な宝飾腕輪も作られた(図1-6-19)。またこの時期には、すでに図1-3-18で紹介したように、ヨーロッパ中世に起源を持つ「フェデリング」を応用した腕輪(結婚腕輪)も作られている。

洋装に着用するペンダントを一般の女性が用い始めるのは大正後期に洋服が普及しだしてから。
 だが一部の貴金属宝石店では、すでに大正前期からダイヤモンド入りのペンダントを売り出していた。
 ここに紹介するのは大阪の尚美堂宝飾店のペンダント広告。おそらく関西在住の洋装を好む上流社会の婦人向けのものだろう。



ダイヤモンド入りペンダント広告

尚美堂宝飾店

大正8年9月5日『大阪毎日新聞』

外国人^{みやげ}土産用ネックレス

旅行で日本に訪れた外国人や公館勤めの外国人土産用の装身具も作られていた。

いろいろ作られたが、ここで紹介するのは大正前期から後期頃のものと思われる**女性用のネックレス**（日本の**女性**がネックレスを用いるのは**洋装が普及する大正後期**から）。

土産品なので日本的モチーフのものが多いが、ほとんど日本を感じさせないデザインのものもある。

図1-6-20は象牙の玉を連ねたネックレス。先端の玉3個にはジャスパール（あるいはコハク）や青色の天然石を象嵌して虫が表現されている。図1-6-21は象牙風素材の上に日本の自然の風景が描かれている。図1-6-22はセルロイド製の大振りな草花を取り付けたチェーンタイプのネックレス。一見するとヨーロッパ製に見えるが、止め金具部分に「JAPAN」と打ってあるので明らかに日本製である。



図 1-6-22
セルロイドのネックレス
止め金具に「JAPAN」の刻印



図 1-6-21
象牙風素材のネックレス
(下) トップ部拡大写真



図 1-6-20
象牙象嵌ネックレス
(下) 先端部拡大写真